連載

骨董百話 72

ローマンガラス丸紋小瓶（ＡＤ５世紀前後、高さ6. 5cm、幅5. 0cm）

まだ若く骨董に興味をもち始めた頃。それこそ東京中の骨董店や露店を見て廻り、到底手にする事も出来ないほど高価な品にため息をつきながらも、身の丈に合った物を少しずつ買い集めた物の中に、ローマンガラスの破片がある。当時、知る限りでは地中海オリエント美術を専門で扱う店はごく少数で、今思えば一級品でなくそこそこの物でも高価な値が付いていた。そうした専門店とは別に百貨店の催場でオリエント展が行われた時に、お土産替わりに買い求めた。それでも完形品などは買う事が出来ないので、例え破片と言えどもその美しさや憧れは何物にも代え難かった。掲載の小瓶は鋳型の中にガラスを吹き込んで作る「型吹き」と言われる方法で作られている。六個の丸紋と口縁に巻き付けられた波状装飾が小さいながらに全体に美しいバランスを与えていると共に容器の首を持った時、滑り落ちないように工夫されている。約四千年前に始まったとされるガラス製造。当初は王侯貴族や富裕層だけの物だったが、紀元前一世紀に吹きガラスの技法が発明され、大量生産が可能となり、一般庶民の手にも入るようになっていった。この小瓶が単に古代の貴重な遺物というだけでなく、一層魅力的な物にしているのは、長年土中にあり、土壌の成分とガラスが化学変化を起こし銀化する事で緑や青、オレンジや黄色など人智を超えた美を纏っているからで、遙かオリエントの風を運んでくれるからだろう。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 71

安南フグ型水滴（15～16世紀、長さ7. 8cm、高さ5. 0cm、幅4. 5cm）

大体の焼き物好き骨董好きの蒐集は、和物を中心に李朝、中国、東南アジアという順番になるのではないだろうか。東南アジア陶器の主流はベトナムで、紀元前から中国の影響を受けながら独自のスタイルを確立していき、最盛期には世界中へ輸出をしていた。日本も江戸初期から茶の湯の道具として、茶碗や水指など輸入していたが、当時相当量作られていて、欧州やインドネシア諸島にも輸出をしていた合子は、知る限りでは一点も伝わっていない。同時期、隣国のタイ（アユタヤ朝）からは茶道の香合番付の上位にある柿の帯香合が輸入されているのに、これ程茶の湯に合致する合子が取り入れられていないのは、不思議でしかない。また、合子とは別に国内用に作られた文房具にも見捨て難い物がある。掲載の小壺はフグ型の水滴で、上部に穴があいているだけの物。同型で上部と口に穴が有り、水注として作られた物もある。このような文房具は型作りの為、量産出来る事を考えれば、当時ベトナムの文化水準の高さを窺い知る事が出来る。他にもアヒルや蛙、猿や水牛や亀。また、親子猿や親子蛙などもあり、小さくてもどれも楽しい造形になっていて、それぞれが文人達の心を癒す座辺の友になっていたのでしょう。この丸々と太っていて愛らしいフグを眺めていると、癒されるより美味しそうに見えてくるのだから、文化の違いは如何ともしがたい。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 ⑦⓪

金箔護摩仏（江戸時代、高さ6. 8cm、幅3. 8cm）

小さくて愛らしく、掌にすっぽりと収まる仏様。表面は金で覆われているが、金銅や鉄のような金属製とは違い、護摩木を燃した灰に膠や漆を混ぜて型に入れ固めた後、それに金箔を貼った物。その起源は詳らかではないが、日本に密教が定着して以降で、古くても鎌倉期を下る事はないと思われている。同じように粘土を型に入れ仏の姿を表した塼仏に似ているが、紀元前から続くこの様式とは時間の隔たりがある事や、護摩の灰を使うなどアジア地域の仏教儀式から見ても日本独自と考えても良さそうだ。護摩は「供物」「生贄」の意味で、サンスクリット語のホーマを音訳したもの。もとはバラモン教やゾロアスター教の火炎崇拝に起源をもち、仏教には大乗仏教成立過程でバラモン教から取り入れられた。従って密教のみの修法といえる。型取りのため相当数作られたと思われるが、脆く小さいので時間の経過と共に徐々に失われていったのか、あまり多く目にする事はないが、時折骨董市で雑多な物の中に混ざって数百年も前の尊い仏様が僅かな金額で売られている事もあるので、まめに探せば見つかるかも知れない。厳しい修行を経た行者が、悩みや願い事を書き写した護摩木を供物と一緒に炎の中へ投じ入れ、燃え上がる供物の煙と共に煩悩や業を仏に食べてもらう。激しい護摩焚きの中から生まれたこの仏様は、丸顔でやさしく微笑み、全てを包み込む慈愛に満ちている。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 69

安南霊獣文ケンディ（15〜16世紀、高さ16.5cm、幅24.0cm、径17.5cm）

安南陶器には中国磁器の厳格さや、李朝陶器の曖昧さとも違った余情幽遠とも言うべき良さがあるのだが、未だに日本では正当な評価がなされていないように感じてしまう。欧米には熱心なコレクターが多く居て専門書も刊行されているが、古くから関わりのある日本ではそれ程でもなく、東京国立博物館でも安南陶器を含め東南アジア美術全体の収蔵品は何か物足りなく、スカスカとした印象を受ける。尤も博物館自体が個人蒐集家の寄贈品で成り立っているという側面を考えれば、仕方のない事かもしれない。掲載の安南陶器は15〜16世紀。インドネシア諸島の王国やイスラム圏へ輸出用として作られ、近年ベトナム沖の沈没船から見つかった物。ケンディと呼ばれている水容器で、その独特の形から乳瓶とも言う。広い鍔の付いた口縁から垂直に伸びた頸部の付け根に蓮弁文、両側面には雲の間を飛翔する霊獣を描いている。かなり上手な絵付けでおそらく専門の画工が居て、特別な注文品や一級品にはその人達が携わっていたのだろう。染付の発色も良くグラデーションの技法を使うなど安南陶器のなかでも高級品の部類に入る。安南陶器に魅せられて30年余り、数多くの出合いがあったが、やはり一級品と呼べる物はそれ程多くはなく、広く一般に知れ渡るにはもう少し時間が必要なのかも知れない。その時にはこのケンディも何処かの博物館の一隅で、静かにスポットライトを浴びていることだろう。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 68

瀬戸　妖怪豆皿（昭和、径5.5cm、高さ0.5cm）

こんなに楽しく不思議な豆皿は今まで見た事も聞いた事もなかった。昭和の初め頃に瀬戸地方で作られ海外に輸出された物だが、近年の里帰りで初めて目にする事が出来た。写真には「ろくろ首」「一つ目」「烏天狗」「二口女」など6種類を載せているが、この他に「河童」「火車」「豆腐小僧」など10種類がある。何れも一枚一枚丁寧に妖怪が手描きされていて、絵柄を見る限り佐脇崇之（1707～1772）の「百怪図巻」を写したような感じを受ける。とすれば未だ見ぬ84種類も存在するのだろうか。それとも元々百種は作られてはいないのだろうか。19世紀後半から沸きあがるジャポニズムの流れのなかで、浮世絵や北斎漫画等は未だに高い評価を得ていて多くのアーティストに刺激を与え続けているが、妖怪だけをフォーカスしてそれを豆皿にしてしまうなんて、まるで現在の妖怪ブームを先取りしたかのようだ。それにしても当時の欧米人に「妖怪」という概念があったのだろうか。注文主の意図は何だったのだろう。今のカードのようにコレクションアイテムとして売り出そうと考えられて作らせたのだろうか。骨董品と呼ぶには時間の長さが足りないが、それでも短い期間だけ作られ忘れられてしまう物が多いなか、妖怪の霊力のおかげで、再び世の人の前に姿を現したのだから、紹介する価値はあるのではないでしょうか。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 67

クメール ガルーダ形鍍金吊り金具（上：高さ10.5cm下：高さ10.5cm、幅11.5cm）

輿の歴史は古く、古代ローマやエジプトだけではなく世界中にあり、身分制度の確立と共に始まったと考えられる。現在でもその意味は違うが、中国やインドなど山頂寺院に参拝する時、輿を使い人を運ぶ仕事が残っている。カンボジアにあるアンコールワットの第一回廊南面にあるレリーフには、スーリヤヴァルマンⅡ世を輿に乗せている場面があり、そこには前4人、後ろ4人、計8人の力者が日本で言う手輿（腰の高さで棒を持つ）で輿を運んでいる姿が浮き彫りによって生きいきと映し出されている。その輿に今回掲載の金具もあり、用途が明らかになっている。写真では分かり難いのだが、この金具はブロンズで出来ていてガルーダが装飾されている。上のフックに棒を差し込み、下の繋ぎ金具に掛ける。下部の金具に四方から乗客の座布を取り付け、その棒を持って運ぶ。レリーフにはこの金具の他にもナーガや花文をあしらった飾り金具も表現されており、本来は青銅に鍍金がされた煌びやかな金具だったので、当時、眩い光を反射しながら、優雅に輿に揺られて行く王の姿は威厳に満ちたものだったのだろう。日本でも近年アンコールワットの遺跡群や石像、女神像等が照会されはじめ目にする機会も増え、その歴史や美術も徐々に認識されつつあるが、同時に金属加工品や宝飾品に関しては、まだ一般的には知られていないので、クメール美術を知る上での一助になればと今回この金具を掲載しました。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 66

緑釉牡丹唐子文壷　中国宋時代（高さ27.5cm、口径16.5cm、底径10.5cm）

中国宋時代（960～1279）は、前時代の唐ほどの国力もなく、常に周囲の異民族からの圧力を受ける等、決して恵まれた時代ではなかったはずだが、長い中国の歴史中、最も文化・芸術が花開いた時と言われている。また、思想でも科学でも例がない程に高度に発達した。その背景には、ずば抜けた芸術家でもある「風流天子」と呼ばれた徽宗皇帝（1082～1135、在位1100～1125）の存在なしには語れない。文化国家を目指したが最後には芸術に現を抜かし、国を滅ぼした皇帝と言われてしまう。掲載の壷はそんな徽宗時代の物。まず目を引くのが鮮やかな緑釉と、いかにもその時代を切り取ったかのような端正な形だろう。壷全体に牡丹と唐子を片切彫という技法で表現している。片切彫とは、文様に沿って線を彫り込み、その片側から斜めに彫り込みを入れる事で、釉を掛け焼成した時に釉が深く溜る所と浅く掛かる所にグラデーションが生じ、単調な文様色調から抜け出し躍動的に満ちたものになる。特に深く彫り込んだ所に溜る釉の美しさは格別なものがある。中国原産の牡丹は唐時代には本格的に栽培鑑賞されていたが、その意匠が工芸など様々な所に取り入れられ、広く生活空間に根付き始めるのは、宋時代からと言われている。何れにしてもこの時代の壷は数が少ないので貴重な物と言えるだろう。この先、どんな時代になるのか誰にも分らないが、人が人らしく生きていく為には、文化や芸術は欠かす事が出来ないだろう。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 65

青銅鳥型器　中国漢時代（高さ16cm、長さ16cn、幅12cm）

鳥居の起源や語源については中国やインド発祥等諸説あり、どれが正しいとする事は出来ないが、何れにしても、神域と人間が住む俗界とを区別する為の「結界」という事に異論はないようだ。古代中国では、鳥は天帝の言霊を伝える使者で、天上から地上に降りた時の止まり木として鳥居が作られたとされていた。他の古代王朝やマヤ文明等、鳥は天と人を繋ぐ特別な存在とされてきた。それだけに古代からその姿形が図案化され、時にデフォルメされながら、宗教や日常生活のなかにも取り入れられてきた。掲載の青銅鳥型器は中国漢時代（前202～後220）の物。胴の部分がこの時代の特徴である卵を縦半分に切って両側に張り出しを付けた「耳杯」と呼ばれている形で、これは陶器でも金属器でも作られていて、当時大いに流行した。珍しいのはその耳杯に鳥の頭部と足を付けて鳥として完成させた事で、足の部分を持って尻尾から酒を飲んだのだろうか。この銅器が鳥型という事を考えれば、何かしら儀式の際に使われた特別な器だと想像できる。首の部分がやや押し潰されている感じなので、本来はもう少し直立していたのかも知れない。現代アートにも通じるフォルムは、近未来的な建築空間に置いても違和感はなくマッチすると思うが、如何だろう。混沌とした現在に降り立ったこの鳥は、天からどんな言霊を託されてきたのだろうか。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 64

スペイン飾り棚（高さ67cm、幅21cm、1830〜1860）

１４９２年イベリア半島で繰り広げられていた国土回復戦争（レコンキスタ）は、イスラム教国最後の砦グラナダの陥落で終結する。その後スペインは大航海時代に突入し、アメリカ大陸やアジア諸国を次々に植民地化して、それらの国々から略奪した莫大な量の黄金や貴重な品々を蓄積していった。止めどなく入ってくる富は決して民衆には行き渡らず、王や貴族、そして宗教家や教会等が独占していた。今も残るそれらの教会に一歩足を踏み入れると、荘厳な装飾に圧倒されてしまう。惜しげもなく使われている黄金だけでも相当な量で、これらのゴシック建築は具象化の極みで華麗ではあるけれど、日本人の目には装飾過多に見えるのではないだろうか。掲載の棚は１９世紀、南グラナダで作られた物。大きな食器棚をそのまま小さくしたようで愛らしい。扉は観音開きになっていて、中は二段の仕切板と小さな引出しがついている。両扉に獅子の顔と正面上部に依頼主らしき横顔がブロンズで作られ取り付けられてある。アルハンブラ宮殿へ向かう広場近くの骨董店で見付け、持ち帰る時の苦労も考えず購入した。日本の小ダンスや指物の箱とはまた違った魅力がある。人でも物でも共鳴し合う何かを見い出した時、急に親しみの感情が沸き愛おしくなってくる。私の心根にはこれ位の装飾が丁度心地良い。

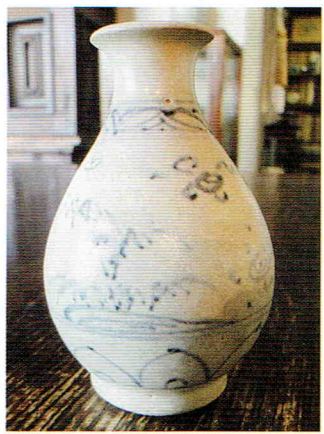
glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 63

安南染付小瓶（高さ10.5cm、胴7.0cm、口径2.3cm、15～16世紀）

身近に使える骨董品のなかに酒器がある。時代や産地、素材や形状等様々あり、必ず自分のお気に入りが見付かる。初めは目についたものをむやみに購入してしまうが、使っているうちに徐々に好みの酒器に落ち着く。また、一度仕舞い込んだ物でも年齢と共にその良さや見所に気づき、再び使いだす事もよくある。何よりも土物と呼ばれている陶器質の肌は、使い込む程に「味」が出て一層愛着が湧いてくる。価格もピンキリで、有名な伝世品等はとても私の手に届くところではないが、値が安くても良い物も見付かるのが酒器の面白いところ。それだけ広く深く物が隠れている。掲載の小瓶は15～16世紀の安南陶。沈没船から引き揚げられた大量の安南陶のなかにも数は少ないが見受けられるので、輸出用として作られた事は確かだが、その用途となると想像の枠を出ない。やや下膨れで首が締まり、くすんだ呉須で竹と雲、太陽を描いている。片手にすっぽりと収まる位小振りで、元より呑んべいには見向きもされまいが、お気に入りの盃で3～4杯楽しむ向きには良いだろう。これも骨董の「見立て」という楽しみ方のひとつ。こうした時代もあり、見所もあり、使って楽しめて、大金を出さなくても購入できる物があるのだからありがたい。良い物が無くなった、見付からないと嘆くより、自分の目を鍛えれば、世の中にはまだまだ見捨てられて埋もれたまま、「早く見付けてくれよ」と言っている多くの物がある。



glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 62

古伊万里山水文長皿（幅22.3×12.2cm、高さ3.8cm、江戸後期）

物事には流行があり、骨董品も例外ではなく、特定のジャンルに絞って物を集めようとする蒐集家が数人いるだけで骨董業界は活気付くし、テレビ・雑誌・美術展等で取り上げられれば、一般の人達の関心も高まり、それらを所有したいと思う人が増えてくる。そうなると再生品のきかない物だけに品薄になり、値段も上がって増々手に入り難くなってくる。古伊万里ブームの時、従来高級磁器として生産された物以外に、今まで雑器の範疇に入っていた猪口や皿、鉢や徳利といった日用食器までも、少し図柄が珍しいと一枚で十万円を超える物まであり、とても日常使う事など出来ないほど出世したが、ブームが去った今は比較的購入しやすい値段に落ち着いている。掲載の長皿は鮎皿とも呼ばれ江戸時代後期の古伊万里。主に焼き魚等を乗せて使用されていた。見込半分に山水と松竹梅の吉祥文様、もう半分は蛸唐草文様を描き分け、口縁と文様の一部に金彩を施した極上手の物で、商家や富裕層の家に伝わり、正月や結婚式等、ハレの日に使われた。当時は10客や20客といった箱に納められていたが、今は少人数用にバラして売られている。現在ならば洋料理や懐石の八寸の替わりや、お茶菓子やケーキ等用途を選ばず幅広く使い勝手の良い器。仕舞い込んだり飾っておくだけではもったいない。使ってこそ当時の歴史と対話が出来るのだから。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢

連載

骨董百話 61

高麗青磁菊象嵌合子（高さ2.8cm、径7.8cm、12世紀末）

30数年前、韓国訪問の際に楽しみにしていたのが、旧朝鮮総督府庁舎を利用した国立中央博物館を訪れる事だった。1926年（大正15年）日本の植民地時代に造られた総督府庁舎は近代の西洋建築を代表する建物で、中に展示されていた素晴らしい美術・工芸品や、歴史ある文物とも同化していて、真に重厚で博物館と呼ぶに相応しいと思っていた。しかし、民族の自尊心はそれを許さず、移築では無く取り壊しという選択をした事は誠に残念だった。しかし、当事者側から見ればこれが当然で、個人の思い入れなどは取るに足らない感傷なのだろう。博物館の中に高麗青磁（高麗時代918～1392に作られた焼物）を展示している一室があり、日本では見る事が出来ない優品や珍しい物を見る事が出来た。初期の高麗青磁は中国磁州窯などの影響を受けながらも、11世紀頃にはその青磁色は中国にも優るとされ、翡色青磁の名で中国にも輸出された。また、高麗独自の技法として、胎土が生乾きの時、そこに文様を彫り込み、別の白土や黒土を埋め浅く削り取った後、青磁釉を掛けて焼成する象嵌技法があり、線画とは違う独特の美しさがある。

掲載の合子は本来化粧道具の一つで、もっと大きな盒（ごう）と呼ばれる蓋付の入れ物の中に何個か入れ、それぞれの用途に応じて使い分けていた。上蓋に花と蕾を白土で、葉を黒土で象嵌し、側面を細かく削り落として文様を際立たせている。やや灰色を帯た青磁釉から12世紀末の物。最盛期の翡色青磁には及ばないが、それでも高麗青磁の品位が保たれているのはさすがと言うべきだろう。

本年も宜しくお願い致します。

glass & antique sara 店主・齋藤 貢